

## へボい虫? クロスズメバチ



## What's in a name?

さかもと のぼる  
坂本 昇

伊丹市昆虫館副館長

昆虫学出身でないわたしは昆虫館で働き始めて関心をもったのは昆虫の文化だった。なかでも「昆虫食」はゲテモノとして興味をもち始めたものの、食べると美味しく、採集や調理も興味深くてすっかりハマリ、研究者の方々の協力を得て企画展も二度開催した。

世界各国の昆虫食を口にする機会を得たが、なかでも大好きなのは日本の「ハチの子」である。おもにクロスズメバチやシダクロスズメバチの幼虫、蛹を指し、地元岐阜県や長野県では佃煮や炊き込みご飯などにして食べる。佃煮が土産物として売られているので、他地域の人でも食べたことがある人は多いだろう。しかし生きたハチの子を巣からとり出し、その場で調理して食べた味は格別で、じつに美味しい。地元では採集や飼育を楽しむ愛好会がいくつもあり、秋には自慢の巣をもち寄って重さを競うコンテストがおこなわれる。そのひとつである岐阜県恵那市串原のコンテストにわたしも毎年通い、見物とともに即売される巣を入手し、秋の味を楽しんでいる。

「ハチの子」のハチは地域によって「ジバチ」「スガレ」などの呼び名があるが、この地域では「へボ」という。愛好家たちは夏につくり始めた巣を採集し、その巣の飼育を楽しむ。彼らに話を聞くと、「へボは可愛い」、「刺されたら痛いけど怖くない」という。へボの飼育に心血を注ぎ、「へボの神様」とよばれた故三宅尚巳さんを訪ねてお話を伺ったとき、三宅さんは「へボはワシのこれだわ」と言って小指を立ててくれた。愛好家の人びとにとってへボは単なる獲物ではなく、愛らしい存在なのである。

しかしこのハチはどうして「へボ」というのだろうか？江戸時代の書物に「へぼ蜂」として紹介され、「へぼ」には「閉防」の字をあてていたことは知っていたが、名のいわれは聞いたことがなかった。もしかしたら、へボを愛する愛好家たちなら何か知っているかもしれない。そこで、串原へ愛好会がおこなう「へボ追い」を見せてもらったときのこと、小休止の時間に疑問をぶつけてみた。すると「知らんわー、お前知つとる?」「いやー、何やるなあ、あまり考えたことなかったなあ」と、その生息を知り尽くした強者たちも知らなかった様子。そのうち、「へボなんて変な呼び方やなあ、へボみたいやもんなあ」、「そうそう、へボいからへボっていうのかもなあ」、「それはそうかもしれんなあ」と言ってみなで笑った。「へボい」とはもちろん、下手くそな人、だめな人をあらわす俗語のことである。「そんなにへボいんですか?」と聞いてみると、へボはハチなのに気が小さくて怖がりだという。土中につくられた巣をとる際には、巣の周りの地面を棒などで叩く、すると親ハチは怖がって巣のなかに逃げてしまい、出入り口から出てこなくなってしまうそう。オオスズメバチなども土中に巣をつくるが、こちらは土を叩いて刺激しようものなら働きバチたちが怒って沢山出てくるという。やはり、へボいという理由も生息を知り尽くした猛者ならではの答えである。

それでもやっぱり、みんなはへボが大好きなようだ。子どもも出来が悪いくらいが可愛いというが、毒針をもつハチなのに小心者というあたりが可愛いということなのかもしれない。